

登場人物の気持ちを読み取る力を高めるための指導（5年）

吉川 秀幸

1 研究のねらい

読書は人を豊かにする、と言われる。しかし、どんな読み方でも人を豊かにするのだろうか、私はそう思わない。豊かにする、というのは、主人公や登場人物の言葉、行動、生き方に触れ、その裏にある心理を自分で読み取ることにより成り立つものだと思う。

私のクラスでは「主人公の気持ちを考えよう」という目標があると、自分のこれまでの経験と照らし合わせて「自分が同じ立場だと悲しいから、主人公も悲しいと思う。」「自分がうれしいと思うから、主人公もうれしいと思う。」と答える児童が多く、文中の言葉をもとに考えることのできる児童が少ない。これでは、文学作品を「読み取る」ことにはならない。

私は、文学作品の読み取りというのは、文中の言葉や表現を手がかりに登場人物の気持ちや場面の様子を読み取ることだと考えている。また、登場人物の気持ちを読み取るための言葉や表現はただ一か所ではなく複数あり、それらを見つけ、つなげることで、気持ちの変化の読み取りがより確実なものになっていくと考えている。

今回の研究では、児童が自らの力で、主人公の気持ちの分かる言葉や表現を探し出し、それらをつなげることで気持ちの変化を読み取れるようにすることを目標とする。

2 教材論

教科書教材「五月になれば」

この教材は、主人公「大樹（たいき）」が、新学期早々に転校が決まる、という設定で始まる。大樹は初め、慣れ親しんだ川と離れたくない、と言う理由で転校をかたくなに拒否をする。しかし、物語が進行するにつれて、徐々に自分の置かれた状況を理解し、最後には転校を受け入れる、というものである。

物語全体を通して、少しずつ心の変化が表れているので、一次実践に適している。また主人公が児童と同じ5年生で、受け入れがたい現実を受け入れていく主人公と自

分の経験をかかわらせながら読むことで、主人公の気持ちを言葉や表現から読み取るのが容易と考えた。

自主教材「おじいさんのランプ」

この教材は、主人公「巳之助」の少年期から始まり、栄光、挫折が描かれた作品である。希望に満ちあふれた時期、ランプ屋の成功という栄光をつかんだ時期、しかし、そのランプに時代を感じ挫折した時期、と様々な心の変化が表れる。やはり、この作品も、受け入れがたい現実を受け入れていくまでの心の変化を捉える作品だが、「五月になれば」より、心の動きの変化が大きく、変化する箇所もたくさんある。そのため、気持ちを捉える言葉や表現を見つけやすく、つなげやすい作品で、二次実践に適していると考えた。

3 指導内容

- (1) 登場人物の気持ちを読み取るためのキーワードを、自分の力で見つけることができるようにする。
- (2) 見つけた複数のキーワードをつなげて考えることで、登場人物の気持ちをより確実に読み取ることができるようにする。

4 指導方法

第一次実践

- ① 主人公の気持ちが分かる言葉を見つけさせるために、先に主人公の気持ちを教師が提示し、それが分かる言葉や表現を文中から探させる。
- ② 自分で主人公の気持ちを考えさせ、それに関する言葉や表現を見つけさせる。
- ③ 主人公の気持ちが表れていると考えられる言葉や表現を複数見つけ出し、そこから主人公の気持ちの変化を考えさせる。

第二次実践

主人公の気持ちの変化が分かるような、言葉や表現をいくつか自分でノートに書き出し、そこから、主人公の気持ちを考え、それらをつないで、気持ちの変化を捉える。

1時間の授業の流れ

目当ての確認



音読



自分の力で
読み取り



話し合い



自分の力で
読み取り



まとめ

両実践とも、1時間の授業の流れを一定にする。

5 実践の経過

第一次実践

「五月になれば」(6時間完了 2/6)

ねらい 主人公の気持ちが分かる言葉や表現を見つけて、選んだ理由を書けるようにする。

児童の様子

全員でめあてを確認した後、本文を読み、活動を始めたところ、大部分の児童の手が止まった。

<授業の初めの児童とのやりとり>

T 「どうしたの？」
S 「わからん。」
T 「なにがわからんの？」
S 「言葉は多分ここだと思うけど、なんでそこなのかわからん。」
T 「どの言葉を選んだの？」
S 「『ひどいよそんなの』ってところ」
T 「いいところ選んだね、何でそこだと思ったの。」
S 「なんか、ここだと思うから。」

左のやりとりのように、言葉は見つけられても、理由が考えつかない児童が多数見られた。「何となく」という答えがほとんどだった。

そこで、全員で文中の『そんなのいやだ』という言葉に着目させ、なぜ主人公がこの言葉を言ったのかを考えた。

<授業中盤での、クラスでの話し合い>

T 「じゃあ『そんなのいやだ』に注目してみよう。なんでこんな言葉が出てきたと思う？」
S 1 「つりに行けなくなるから。」
T 「でも、その前の文章に『いつか…来ような』って書いてあるよね。」
S 2 「……」
T 「じゃあ、転校したら、今までみたいに好きなときに来れる思う？」
S 3 「絶対に来れない」
S 4 「いつも来たいから、転校したくないんだ。」
S 5 「好きなときに来れなくなるから『そんなのいやだ』って言ったんだ。」
T 「そう！わかった？」
S 6 「なんとなく」

右のような話し合いを行った後、授業の最初で『ひどいよそんなの』という部分を選んだA児はその理由に「いきなり急な話だったから」という理由を考えることができた。

<授業後のB児のノート>

B児は、左のように、「新学期になってすぐ転校だなんて」という言葉を選び、「友達とつりに行きたかったのに、行けなくなったから」という理由を考えることができた。

また、C児は同じ部分を選んだが、理由に「新学期になって、野球やクラスのこととか、楽しいことがいっぱいあるのに転校するのがいやだ。」と理由を考えることができた。

考察

<第5時のD児のノート>

授業の終わりに書いた感想では「難しかった」「意外と簡単だった」と児童によってその感じ方がばらばらであったが、「文中の言葉や表現を手がかりに登場人物の気持ちや場面の様子を読み取る」という研究の第一歩が踏み出せた結果となった。

「五月になれば」(6時間完了 6/6)

ねらい 主人公の気持ちが表れていると考えられる言葉や表現を複数見つけ出し、それらをつなげ主人公の気持ちの変化を考えさせる。

児童の様子 前回から授業を重ね、主人公の気持ちを、キーワードから考えられるようになってきた。一部の児童は、気持ちを読み取る際に、いくつかのキーワードをつなげて考えられるようになった。(右、第5時のD児のノート) 文中の言葉から気持ちを考え、さらにその考えから次の言葉につなげている。

本時はまず、本文全体を通して、次第に主人公の気持ちに変化していていることを確認した。その後、転校を前向きに受け入れ、転校までの期間を精一杯過ごそうとする部分を読み取った。

<F児とのやりとり>

T「転校を知った時と、今の大樹の気持ちって変わったのかな？」
 S「変わったと思う。」
 T「前はどんな気持ち？」
 S「前は、友達と離れたり、つりができなくなったりするから、絶対に転校はいやだった。」
 T「じゃあ今は？」
 S「転校はいやだけどしょうがないと思ってる。」
 T「じゃあ、それがしっかり分かるような場所を探して理由を考えよう。」

F児とのやりとりのように、主人公が転校を受け入れる気持ちになったと考える児童がほとんどだった。

G児	H児	I児
<p>わかって、別の時までせいっぱい楽しくもうと いう気持ちになったんだと思う。</p>	<p>「めいっばい、この川といっしょにいよう」と、 あるから、転校したくないという気持ちから変 わって、別の時までせいっぱい楽しくもうと いう気持ちになったんだと思う。</p>	<p>大樹ははじめ、転校がいやだったけど、三か月 のあいだに、「大好きな川とめいっばいいよう」、 と思うことで、前向きに考え始めたんだと思う。</p>

左の3人の記述は、最初の主人公の気持ちと、最後の気持ちの変化を読み取ったノートである。

3人とも文中の言葉から気持ちを読み取り、変化を捉えている。

考察 文中の言葉から、気持ちを考えるという活動は、ほとんどの児童ができるようになった。しかし、一つ一つの言葉や表現からは考えられるようになったものの、文章をつなげて考えるという段階では、つまずきが見られた。原因として、①文章全体で心の変化が少なかったこと ②1時間に読み取る文章の量が少なく、考えられる部分が少なかったこと、が考えられる。

そこで、第二次実践では、気持ちの変化（喜怒哀楽）が分かりやすい教材を選ぶこと。1時間あたりの文章量を増やし、気持ちの変化を捉えやすくすること、の二点を工夫する必要があると感じた。

第二次実践

「おじいさんのランプ」（7時間完了 3/7）

ねらい 主人公の気持ちの変化を本時で行う授業の一部分で読み取ることができるようにする。

児童の様子 1時間で読み取る文章の量を多くしたため、最初はとまどっている児童が多かった。しかし、第一次実践のときよりも、気持ちの変化が読み取りやすいため、児童がしっかり考えることができた。

文章が長いので、児童には本時に行う文章すべてを読み取るのではなく、一部分だけできればよいと伝えた。

<クラス全体での話し合い>

T	「今日のめあて、人力車をひく、巳之助は、どんな気持ちだったのかな」
S 1	「苦しかった」
T	「そうかな。」
S 2	「違うんじゃない？だって『苦にならなかった』って書いてあるよ。」
T	「そうだね、じゃあ、どんな気持ちだったんだろう。」
S 2	「『好奇心でいっぱいだった』って書いてある。」
T	「なんで、好奇心がいっぱいだったのかな」
S 3	「『物ごころついてから、村を一步も出たことがない』って書いてあった。」
T	「いいね、じゃ今出たことをノートにつなげてみよう。」

この話し合いのように、次々と文中の言葉をもとにして答える児童が多かった。

<矢印を多用しているJ児のノート>

左のノートは、J児の授業のノートである。○で囲んであるところに、矢印や「だから」という言葉を使っている。このように、言葉や表現から気持ちを考え、さらにそれが次の言葉や表現につながっている、と考えることができた。

一人一人が様々な部分を読み取り、全体で発表することで、授業の最後には、1時間で行う文章全体の読み取りもできた。

考察 第二次実践の前半としては予想以上によい授業となった。「なんで、苦にならなかったの。」「なんで、好奇心いっぱいだったの。」というように。「なんで」という言葉を多く使ったことで、児童がその理由を探せたのだと思う。その際に文中からその理由を見つけようとしたことは、第一

次実践で行ったことが生きていると感じた。

しかし、気持ちの変化を読み取ることはできるようになってきたが、目当てに対する答え、気持ちの変化の最後の部分を読み取ることがなかなかできなかった。目当てに対する答えをしっかりと出させる指導が今後は、課題となった。

「おじいさんのランプ」(7時間完了 7/7)

ねらい 主人公の心の変化の読み取りを、本時で行う全文でできるようにする。

<矢印で第5時終了後のJ児のノート>

児童の様子 前回の課題で、めあてに対する答えの部分に重点を置き指導をしていき、前のノートのJ児は「巳之助は、どんな気持ちでランプ屋を続けたのだろうか。」というめあてに対し、いろいろ気持ちの変化を読み取った後で『これからもランプ屋を続けていく決意』と読み取ることができた。(左のノート)

また他の児童も、矢印や「だから」という言葉を使い、心の変化を読み

取っていくことができた。

本時は、「おじいさんのランプ」の最終場面で、巳之助がランプを木につるし、割っていく場面が書かれていた。そこで「どんな気持ちでランプ屋をやめたのか」というめあてを設定した。

<クラスでの話し合い>

T 「何で巳之助はランプを割ったんだろう。」

S 1 「ランプが好きだったから」

T 「なんでランプが好きだと、割るの？」

S 2 「ランプにみじめな思いをさせたくなかったから、割ることで、なくなってしまふから。」

T 「じゃあなんで、全部割らなかったの？」

S 1 「自分がランプのおかげで、商売が成功したから、やっぱりランプが好きだったから。割ってしまうのはランプがかわいそうだと思ったから。」

T 「巳之助にとってランプって何だろう」

S 3 「大切なもの」

T 「他には？」

S 2 「…」

T 「巳之助は何のおかげで、商売が成功したんだった？」

S 4 「ランプ」

T 「ということはランプと巳之助の関係は？」

S 5 「離れられないもの」

ここまで、話し合いをした後、クラスの児童に「ランプ＝巳之助」という考えはどうか提示した。どの児童も一様に驚いた様子だったが、とても納得していた。

6 研究のまとめ

(1) 成果

今回の研究の目標である「児童が自らの力で、主人公の気持ちの分かる言葉や表現を探し出し、それらをつなげることで気持ちの変化を読み取れるようにする。」ということについて、第一次実践の初期のノートでは、一つの言葉や表現に対し、一つの理由しかかけなかったが、第二次実践後期のノートでは、言葉や表現と気持ちとがどんどんつながっている。それを考えると、研究は成功したと考える。

ここまでできた要因としては、「目当ての確認→音読→自分の力で読み取り→話し合い→自分の力で読み取り→まとめ」というように、授業の流れを一定にしたことで、それぞれの活動にすぐに取り組むことができたからだと考える。

また、毎時間必ず、文章に添った読み取りができた児童のノートをクラスに配布することで、「次は自分のノートを紹介してほしい。」と意欲がわいたのも要因と考えられる。

(2) 課題

今回の実践の課題として残ったのは、児童間での意見の交換があまり行われなかった点である。児童が読み取ったものを、教師が黒板に書き、ある程度意見が出終わったところで、教師がそれらをまとめる、という形になってしまった。児童間で、もっと様々な意見を出し合い、討論する形になれば、さらに読み取る力が高まったと考える。今回は、教師が読みを深める役割を担ってしまった。そのためノートには、自分の書いたのとは別に、黒板に書いたものを写す部分が多くあった。

今後は、更なる発展として、全体の流れを読み取った後、ひとつの場所に注目して、主人公の気持ちやその変化を、じっくり考える時間を取りたいと思う。

(名古屋市立平子小学校教諭)

実践記録を読んで

廣田隆志

この実践記録を書いた吉川秀幸さんは、本学の初等教育課程国語専修で平成16年3月の卒業生である。初任校は名古屋市立平子小学校で、4年目を迎えている。研究テーマは、「登場人物の気持ちを読み取る力を高めるための指導」(5年)であり、子供たちに読みの力をつけるために緻密で実態に即した指導を行っている。以下、それについて述べる。

1、研究のねらいが明確であること

吉川さんは文学作品の読みについて、「文中の言葉や表現を手がかりに登場人物の気持ちや場面の様子を読み取ること」であり、その「言葉や表現はただ一か所ではなく複数あり、それらを見つけ、つなげることで、気持ちの変化の読み」が確実になっていくと考えている。そして、この研究のねらい(目標)を、

- ① 児童が自らの力で、主人公の気持ちの分かる言葉や表現を探し出し、
- ② それらをつなげることで気持ちの変化を読み取れるようにする

としている。まず、「主人公の気持ちの分かる言葉や表現を探すこと」、次に「言葉や表現をつなぐことによって気持ちの変化を読み取ること」とこの二つがねらいであることを明確にしている。また、「児童が自らの力で」という文言から一人一人の読み